

アラフォー世代からの 出産・子育て

40歳で授かった命

人生最初で最後の妊娠が分かったのが、40歳と3か月の時。39歳で入籍して半年ほど経った頃のことだった。妊娠試験薬で陽性と出た時の私はそれはそれは焦り、狼狽したものだ。結婚して間もなく、しかも40歳という年齢にもかかわらず子供を授かったことは本来有難い限りの話で、手放して喜んではいはずである。が、私の第一声は「どうしよう…。まずい」であった。

夫は普段から子供を持つことをよく口にしていた。「ああ、夫はやはり子供が欲しいんだ」そう思いながらも、妊娠するには高齢のうえ、テレビの世界で長年働き続け、昼夜逆転の生活でさんざ痛めつけた身体である。よもや子供なんてできるまいと、夫には申し訳ないが、秘かにたかをくくって

いるようなところがあつた。正直言って、自分の妊娠が分かるまで、子供が欲しいと思つたことはそれまでの人生の中でただの一度もなかつた。結婚は望んでいたものの、生涯一仕事人というのが私の強い思いだったから、仕事の妨げになりそうな子供などというものには本当に関心がなかつたし、母親業というのは私とは別世界の話だと思ひ込んでいた。

しかし、不思議なものである。早速、夫と母親に妊娠したらしいと告げると、二人とも想像を超える喜びようである。産むしかない。これが私に与えられた天命なのだとたちまち思えるようになったから、我ながら不思議なものである。幼稚園や小学校時代のいわゆるママ友から「あなたほど子煩悩な母親はほかにいない」と口々に言われた。夫からも「こんなに子供を溺愛する



南 美希子

キャスター・エッセイスト

【みなみ みきこ】1956年東京生まれ。大学3年在学中にテレビ朝日アナウンサー試験に合格。1977年にテレビ朝日に入社。1986年に独立。現在もテレビ、ラジオ、執筆、講演、シンポジウムなどで活躍中。光文社の女性誌「VERY」に8年間連載した「40歳からの子育て」が高齢出産のさきがけ的発信として大反響を呼ぶ。健康美容コミュニケーターの資格も持ち、アンチエイジングや医療に関する仕事や執筆も多い。

女性だったとは想定外だった」と今でも言われる。

婦人科の検査で妊娠が確定的になり、医師から「(妊娠を)ご継続されますか?」と問われ、「はい!」と力強く答えた瞬間から、自分の体内に授けられた命を全身全霊を持って守り抜き、育て上げるぞという決意に満ち満ちていた。与えられた運命はいかなるものでも甘んじて受け、そこで最善を尽くすというのは、私自身の生きる哲学でもあるが、それが最も顕著に発揮されたのが「40歳からの子育て」だったように思う。

たった一人での出産

幸い妊娠中の経過は極めて順調だった。つわりもほとんどなく、というより、妊娠に全く無頓着だったものだから、妊娠初期

の体の不調を長引く風邪だと思い込んで、今思うと怖いくらい風邪薬を飲んでいた。妊娠が発覚したのははや安定期に入っている頃だったので、健康極まりない妊婦としては妊娠中の想い出は幸福の感触しか残っていない。完全に安定期に入ってからでは精力的に講演活動をこなし、地方を飛び回り、テレビ・ラジオ・雑誌にと忙しく立ち働き、雑誌、新聞の連載だけで13本抱えていた。旺盛過ぎる食欲に時に辟易しつつも、仕事

も家庭も充実し、生まれてくる新しい命に対する期待感に胸を膨らませ、私のこれまでの人生の中でも最も幸福で平穏で充実した時がこの妊娠期であったと言っても過言ではない。妊娠・出産に対する関心がこれまで皆無だったのに加え、仕事がとつともなく忙しかったため、母親学校に通う時間が全く取れず、私は出産の日を迎えてしまった。最終生理日さえ答えられず、医師が超音波に

写った胎児の映像で出産予定日を算出してくれたのだが、これがやや遅めにはじきたようだ。出産の丁度2週間前まで私はいつもどおりに働き、テレビ出演をこなしていた。

出産は、前夜の午前2時のいきなりの破水から始まった。病院に電話をすると入院の支度をしてすぐに来てくださいという。荷物はまとめてあったので、夫を揺り起こすも、何度試みても起きてくれない。建築家という仕事柄、連日連夜の徹夜がたたっているんだろう。夫に頼るのを断念し、一人でタクシーに乗って病院に乗り込んだ。結局、出産時もたった一人で臨んだ。



朝一番で病院に来てくれたものの、「実はこれから出張なのだけれど」とときまり悪そうに告げる夫を行ってらっしゃいと送りだし、心配して駆けつけた母親にも立ち会ってもらわなかった。これにはわけがあった。母親学校に行きそびれたため、出産時の呼吸法を全くマスターしておらず、陣痛が始まってからは付き添ってくれた助産婦さんのガイダンスに集中するためだった。「頑張れ!」「大丈夫?」という励ましが、集中の妨げにならないようにという思いだったが、正解だったと思う。ただ、私が20代の妊婦だったら、せめて夫には立ち会ってほしいと望んだだろう。この類稀なる自立心は、勿論パーソナリティーによることも大きいだろうが、やはり40歳という堂々たる年齢によることも大きいように

思う。

退院の夜から育児の試練

自然分娩のうえその後も極めて順調な経過をたどり、1週間足らずでの退院となった。が、その退院の夜から、いきなり「育児の試練」というものが私の身に降りかかり、性質と内容は変容しつつも、17年近く経った現在もその試練は継続中である。高齢出産のデメリットを挙げるとしたら、私の場合、身内の援軍を頼めないという点が一番大きかった。

双方の両親がかなりの高齢者になっているうえ、うちの場合、母は自らの母親の介護に明け暮れ、とても娘の育児の手助けをするという状況ではなかった。しかも夫の両親は九州在住なので、そもそも手を借りられる状況にはない。近くに身内はいないし、ある意味孤立無援の育児がスタートした。現在ではネットなどでの情報が横溢し、むしろ育児情報過多に戸惑う新米ママも多かるうが、17年前は育児雑誌とて、ポピュラーではなかった。人生の先輩から贈られた松田道雄さんという医者を書いた『育児の百科』というのが、暗がりて歩く時の唯一の行燈みたいな存在であった。この『育児の百科』はそれこそ私が幼少の頃から存在する名著中の名著で、むしろあれこれ迷わずに信じるものはこれ1本と思えたことは幸運だったように思う。

とはいえ、初めての育児、しかも孤立無

援に近い育児は戸惑いの連続だった。第一、赤ん坊を自宅に連れ帰ったその夜から、夜中に泣き止まず途方に暮れた。「赤ちゃんが泣いている時は、ミルクかおむつのチェックを」と助産婦さんに教えられたものの、実際はセオリーどおりに行かないのが育児というものである。夜中に母親の私が半べそをかきながら、夜勤勤務の助産婦さんに何回電話で相談に乗ってもらったことだろう。いまだに感謝している。

しかし、夜も満足に眠れない状態で果たして仕事復帰など叶うのだろうかと思ってしまう。3週間あまり、相変わらず自らの仕事に明け暮れる夫を尻目に一人で悩み抜いた。寝かしつけようと思っても寝てくれない。泣き止んでほしいと思っても止まらない。仕事においてはあらゆる局面で対処できる経験則を身につけているはずの自分が、育児に関しては驚くほど無力だった。

しかし、これまた不思議なものである。1カ月ほど経った頃だろうか。自分の食事中や家事の最中、或いは執筆中に赤ん坊が泣いても、「大丈夫、ママはあなたを愛しているから、なんでも許してあげるわ」と、ふとそんな心境に思い至ったのだ。激しく泣いても優しく背中をトントンとたたきながら抱きしめてやる。すると不思議、不思議。赤ん坊もやがて泣き止み、穏やかな表情でこちらをみつめるのだ。新米ママと新米(?)赤ちゃんの心意気がピタッと合致したよう

な瞬間だった。

以来、いかなる局面でも我が子には有り余る愛情で接する。それは決して甘やかすではなく、人間には授乳用のミルクと同時に愛情という精神的ミルクが必要なのだ。愛された人間だけが他者に真の愛情を注げるのだという考えはいまだに私の育児における基本理念になっている。この悟りもまた、40歳という年輪が幸いしているように私には思えるのだ。

職場復帰してからの育児

葛藤の日々を経て、丸2か月後に職場復帰を果たした。職場復帰と言っても私の場合、レギュラーのテレビ番組に戻り、講演やシンポジウム、執筆といった自分の仕事の現場に戻ることを意味する。何時から何時までという制約がない分、夜遅くまで時間を要する仕事もあれば、朝早く出て行かなければならない仕事もある。さすがに出張はしばらく控えていたが、いかんせん、身代わりのきかない仕事である。というよりも「仕事に穴をあけること」仕事を失うことでもある。たとえ我が子が高熱を出そうが、仕事にだけは穴をあけられない立場にある。そんなわけで、病児を預かってもらえない保育園は最初から選択肢の中に入れられず、ベビーシッターさんを生後2か月目から二人雇い、ウイークデーは毎日来てもらっていた。多額の出費は懐に響いたが、まだ乳児の頃の1〜2年間はおむつかえとミ



ルク、或いは離乳食、散歩といった内容がシッターさんに託す主な仕事であったため、赤ん坊を預けて、かなり精力的に仕事をこなしていた。

育児を実体験してみても初めて分かったことなのだが、いたいけな赤ん坊時代ほど、全幅の信頼をおける相手であれば母親は安心して赤ん坊を預けられ、意外と自分自身の時間を捻出できるものである。なぜならば、生物的な世話が大部分をしめるからで

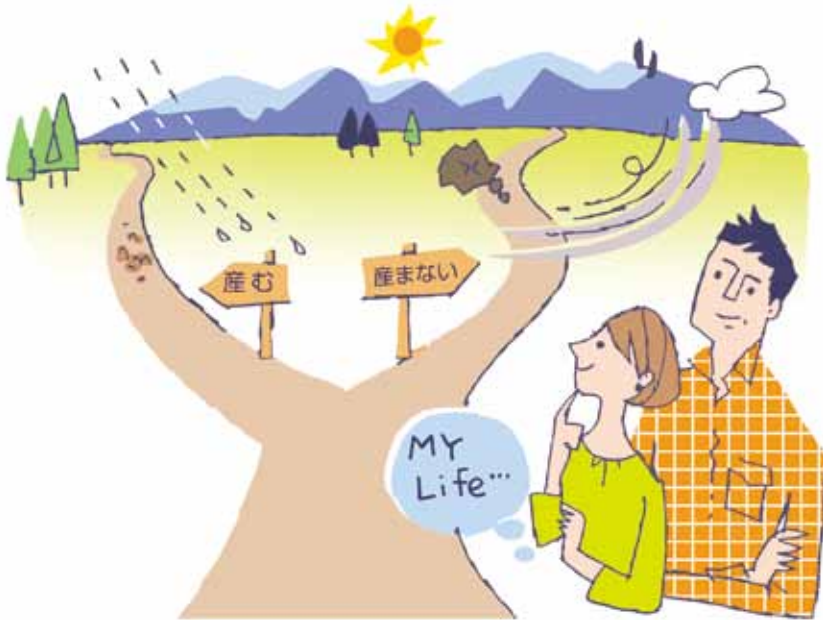
ある。勿論、赤ん坊にも情緒の育成という大切な側面はあるが、この重要性が増してくるのは3歳以降で、さらに学習の習慣付けという難題が降りかかってくるのは、就学年齢に達してからである。このことは後でまた詳しく述べたいと思う。

とはいうものの、育児における責任者は両親であり、中でも肌身で子供に密に接する母親は育児におけるCEO（最高経営責任者）であると私は確信している。どんな

ところに預けるにしても、手綱は常に母親が握り、すべてを人任せにはしない。また、子供を任せる保育者には情熱を持って母親の方針をはっきりと伝えるべきで、勿論、軋轢は避けなければならないが、遠慮や躊躇は無用だと思っている。

また、働きながら子育てをする母親は、仕事以外は子供のことを最優先すべきなのは言うまでもない。ただ、専業主婦に比べて育児時間が少ない分、共に過ごす時間がより濃密になるのは歓迎すべきことかもしれない。うちの場合、子供が眠りにつくまでの時間が母子のかけがえのない時間で、幼稚園時代を中心として毎晩欠かさず1時間の絵本の読み聞かせをやったものである。

最近、本来ベビーカーを押して立ち入るべきではないと思われる遊興施設などで若い母親たちの姿をみかけ、びっくりさせられる機会が多い。若いうちに娯楽を謳歌したのちの出産は、自分の欲求を抑えて育児に専念できるというメリットがあるように思う。そして何よりも、経験を積んできた分、ぶれにくいということは育児においても最大の強みだと私は思っている。反対に、デメリットはと尋ねられれば、先に挙げた身内の助けを借りられないことと、自身の体力が下降傾向にある年代なので、若い母親が難なくこなすことも、しんどいと思うことも時折ある。しかし、これは夫婦共闘で乗り切ればさほど大きな問題ではないと思う。



ところで、「子供が小学校に上がったから、ようやく一段落するから、そうしたらまたエンジン全開で仕事にも打ち込みたい」と、これが子供が就学前の私の口癖だった。「学校さえ上がったらもう一安心」とは巷間言われていることだが、これは大きな間違いだと思う。私の場合、小学校・中学校時代の9年間に大きなエネルギーを投入することを余儀なくさせられ、結果仕事もかなり削減せざるを得なかった。

学校が上がると、俗に言う読み書き、計算を習うようになる。学校のカリキュラム

に従って我が子がこれらを着実に励行してくれると思っただが大間違いだ。言い方は悪いが、小学校低学年の子供などというのは野ザルのようなものである。つまり、放っておけば、野を駆け回り、遊びに夢中になる生き物である。逆に、小学校低学年からきちんと机に座り勉強する習慣のある子供の方が不気味である。遊びたくて遊びたくてたまらない生き物を、まずは机の前にしっかりと座らせる。そして、毎週の漢字テストの10文字をしっかりとおさらいさせる。百マス計算の類いも然りだ。

こんなふうに学習習慣はもとより、公共性やマナーを身につけさせることなどは、親以外の誰も担ってくれないので、ここで手を抜くと将来あらゆる意味で親子ともども苦しむことになると思う。

また、うちの場合一旦は中学受験と高校受験を目指したため、この受験勉強の壮絶さは今思い出してもぞつとするくらいだ。大学受験は本人の努力のみで、親は健康と学費の心配さえしていればいいが、とくに中学受験は基本的に親との二人三脚である。出来が悪いと、しょっちゅう塾から呼び出しをくらうし、塾の迎えや夜食弁当、また学校の勉強との両立の心配など、すべて母親の双肩にかかるようなところがあった、これにはさすがの私も根をあげたものだ。また、うちの場合、中学時代に勉強の手法で一時つまずいたので、これを軌道に乗せるまでが大変であった。

産むという選択、産まないという選択

さて、ここまでお読みになって読者はどう感じられただろうか？「私には到底無理だわ」と思われただろうか？ 或いは「40歳からの子育てって面白そう！私も挑戦してみたい」そう思ってくれただろうか。私が60年近い人生を生きてきて、後輩の若い女性たちに向ける出産についてのアドバイスは一貫している。それは、産むという選択もあれば、産まないという選択もまたあるのだということである。

少子高齢化は進む一方で、子供を持たない女性は益々肩身が狭くなるかもしれない。しかし、子供を持たずに自分の仕事に人生を捧げるという生き方も当然ありだと思われ、私自身子供がいなかったら仕事でもっと大きく飛躍できていただろうと思うことも実際ある。他人の人生に倣い、私も子供が欲しいと横並び精神で出産を選択することは賢明ではないと思う。もつとも、出産は基本的には夫婦の意志でもあるから、自分一人で決められることではないけれど…。

私自身は、日ごとに逞しさを増し、自分の目指す将来の夢に向かってまい進する息子を愛おしく微笑ましいと思うし、全力で応援したいと思う。また、そんな自分を母親として幸福だと思う。すべては「天命を受け入れ、その下で最善を尽くす」高齢出産についてもこの一言に尽きるように私は思うのだ。